



講演記録 経営学におけるオートエスノグラフィーの 導入 : 研究者がひとびとの心に刺さる本を書く意味

高橋, 勅徳

(Citation)

国民経済雑誌, 228(1):107-131

(Issue Date)

2024-03-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/0100487669>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487669>



国民経済雑誌

THE
KOKUMIN-KEIZAI ZASSHI
(JOURNAL OF ECONOMICS & BUSINESS ADMINISTRATION)

経営学における
オートエスノグラフィーの導入：
研究者がひとびとの心に刺さる
本を書く意味

高 橋 勅 徳

国民経済雑誌 第228巻 第1号 抜刷

2024年3月

神戸大学経済経営学会

講演記録

経営学における オートエスノグラフィーの導入： 研究者がひとびとの心に刺さる 本を書く意味

高橋勅徳^a

講演紹介

2023年の前期に経営学研究科「定性的方法論」の最終講義（2023年7月31日（木）於：神戸大学六甲台第1キャンパス本館306教室）において、高橋勅徳先生（東京都立大学大学院経営学研究科准教授）をお招きした。高橋先生は、2002年に本学経営学研究科を修了され、特に企業家研究を専門として精力的に研究成果を発表されてきた。この度、ご講演にあたっては、専門書としては異例のヒット作になった『婚活戦略』（2021年、中央経済社）およびその後に出版されていく著作の執筆過程を、方法論の観点から整理してほしいとリクエストさせていただいた。若干の補足をする、本研究のオリジナルとなる論文は、本学の國部克彦と松嶋登が編集責任を担当した、日本情報経営学誌の価値評価研究特集号（2020年、第40巻、第1-2号）で発表され、その時点で高橋先生の論文はJ-Stageでの異例のダウンロード数を記録していた。なお、数量化やランキングなどによって比較可能となる評価が、様々な価値を作り出していく実践に注目する価値評価研究は、その基礎理論のひとつに制度派組織論がある。高橋先生は、わが国における制度派組織論の理論研究の集大成である、桑田耕太郎・松嶋登・高橋勅徳（編）『制度的企業家』（2015年、ナカニシヤ書店）も共同編纂されている。本講演のより深い理解を求める方には、ぜひお読みいただきたい。

講演会コーディネーター：経営学研究科 松嶋登

講演要旨

近年、経営学を含む社会科学全般でオートエスノグラフィーという、新たな方法が試みられている。研究者も社会現象を担う一人の主体として捉え自身の体験を研究の対象とするだけでなく、小説や詩など表現の手段を問わないオートエスノグラ

a 東京都立大学大学院経営学研究科, misanori@tmu.ac.jp

フィーは、その過激さとラディカルさ故に注目が集まるあまり、その含意が見落とされがちな方法論でもある。近年はアカデミックなモノグラフに求められる一般化可能性を、調査・分析の手続きの洗練に求め、フィールドワークにおいても定性的に見出した発見を定量的に検証していく混合研究の必要性が指摘されている。混合研究とそれを容易にする分析支援ツールの登場は、フィールドワークを通じて研究者が現場に積極的に関わり、社会に介入していくダイナミズムを失わせる、フィールドワークの終末と呼ぶべき危機を招いている。このフィールドワークの終末に対して、オートエスノグラフィーは、一般化可能性を記述によるリアリティの獲得に求め、感情へのリーチ、議論の喚起、メディアの拡張を意図した独特な記述スタイルによって、この危機の克服を目指している。本講演ではギアツの厚い記述やシカゴ学派社会学の振り返りを手がかりに、定性的方法論が目指してきた独特な視座を再確認し、混合研究からの解放を目指したオートエスノグラフィーを実践について、特に書籍を通じた社会との関わりという観点から、筆者自身の経験に基づいて明らかにしていきたい。

キーワード オートエスノグラフィー、フィールドワークの終末、
リアリティと一般化可能性

1 はじめに

はじめまして、東京都立大学の高橋勅徳です。本日は、経営学を定性的方法でやるということはどういうことか、この研究領域、経営学に限らず社会科学全般にこびりついた通説、俗説みたいなものを紐解きながら、なぜエスノグラフィーの先にオートエスノグラフィーという方法が求められるようになったのかを、古典を遡りつつお話をしたいと思います。

具体的には、現場に行って人の話を聞いたり見たり、当事者として関わったことに基づいて論文を書くことについて、その源流であるシカゴ学派社会学から振り返っていくことで、一方では手法の洗練とともに終末を迎えつつあるフィールドワークの危機と、他方で極めてラディカルな方法として登場したオートエスノグラフィーの狙いを語ることになります。

その上で、この講義では私がオートエスノグラフィーを実践していくことを通じて考えた、研究者がなぜ論文や本を書いて、どういう媒体に載せて誰に届けるのか、ということまで考えた執筆戦略についてお話ししていきたいと思います。

今日の講演のテーマの大事な部分なのですが、学者として論文を書く動機は、社会を良くすることにあると思います。社会とか会社に対する不満や問題や疑問などがあって、それらを何とかしたいと思っているから、人は経営学を含めた社会科学の論文を書く。そういうふうに、研究活動とは現場に介入していく実践ではないかと考え直したとき、論文でも書籍でも、どの媒体に載せるのか、どういうふうに誰に届けるのかということを、不可避に考え始

めたのがオートエスノグラフィーという方法であると思います。そこで研究成果を出版した際に、誰にどう届くのか、どういう反響が返ってくるのかということ、私自身がこの4年ぐらいの期間に経験してきたことも含めて、お話しさせていただけたらと思います。

2 厚い記述への誤解

もう20年以上前に神戸大学のこのキャンパスで、私も定性的方法論の授業を受けていました。エスノグラフィーのテキストとして読まれたのがギアツ（1973）の『文化の解釈学』で、厚い記述とは何かを問うレポートを課されました。当時担当された先生は誰だったかは、もう思い出せないのですが「人間というものは自分自身が張りめぐらした意味の網の目にかかっている動物である。意味の網の目にかかった動物が、どういう意図で、どういう解釈でどういう行動をとったのかという意味的な行動、行為というものを捉えていきましょう」というのがエスノグラフィーであり、フィールドワークであり、定性的方法であると教えられました。大学院に入学したばかりの私は「なるほど、こういう手があるのだ」と非常に感心して、この世界で学者として生きていく一つの戦略として、定性的方法というものにこだわっていかうと考えたわけです。

20数年前の私は、「われわれの社会にはルールみたいな形で文化が存在していて、私達は無意識的にも有意識的にもそれに従った行動をしている。だとしたら、人間の行動の意味は、その文化を読み解いていくことで理解可能になる。その文化を読み解くときに外から観察するのではなくて、自分が現場の人として同じ目線を持てるようなところまで入り込んだ上で、アカデミズムに戻ってきてそれを書く必要がある」、というのがエスノグラフィーだと理解しました。実際にエスノグラフィーってこういう理解がされがちなのですが、実のところこの理解は間違っていたわけなのですけどね。

ギアツの厚い記述で有名な目配せの事例がありますが、人はお互いに何かを伝えるときの合図としてウィンクをします。それは、そういう視線の合図がルールとしてあるから成立する。実はそのルールを説明する形の記述を、ギアツは薄い記述と指摘します。

ギアツが目指す厚い記述というのは、そういう視線の合図のルールがあるとして、誰かがウィンクをした。ところが実はただのまぶたの痙攣の可能性がある。そこで対面の人が、そのウィンクの仕方が違うよと正しいウィンクの仕方をしたとする。その状況を見て、更にそのときに第三者が、からかう目的で変なタイミングでウィンクをする。結果として、お互いに全員で目をパチパチしている状況になっている。その3人の行動は、一方では正しい行動を教えようとしていて、他方でイタズラを仕掛けていて、さらにもう他方では単純に臉が痙攣（けいれん）しているだけだったりする。それでも、視線の合図がルールとしてあることを前提とすると、何人かの人間がお互いに目をパチパチさせている状態が実は社会現象とし

て分析的に記述していくことを、ギアツは厚い記述と表現した訳です。

ある集団では、特定の人間の身体動作というものに、何らかの有意義な意思疎通の手段を設定する文化が存在する。当事者も部外者も、そういう文化があるから、秩序だった行動ができる。ところが実のところ、当事者を含めて、何を文化としているか実際には分からない。そもそも、「私達の行動を決定する文化があります」と書いても、それが本当にその通りなのかは、誰にも絶対に確定できません。だからこそ、社会科学的な記述は、文化のように研究者が分析的に設定した概念から、社会を分析して、理解していく、理解してもらうあり方しか無いというのが、ギアツの立場だと思います。この、ギアツが厚い記述で目指したことを、ちゃんと理解していくと、「現場に行って、その人達の文化を当事者として理解する」という考え方そのものが、大きな誤解であったことが判ると思います。

更に、ギアツ（1973）が目指した厚い記述の考え方を良く表している記述として『文化の解釈学』では、「合法性とか近代化と統合化とカリスマ、構造、意味などの重要な概念に、はっきりとした現実性、リアリティが与えられるような記述をする」（邦訳、40頁）と書かれています。そう考えると彼が厚い記述に求めたのは、アカデミズムで議論される理論や概念が、現場にあるのだというリアリティを感じさせる記述ではないかと思います。

3 シカゴ学派社会学の展開

経営学に限らず社会科学としてフィールドワークをやっていると、1回は通らざるを得ないのがシカゴ学派社会学なのですが、松本康先生が2021年に『「シカゴ学派」の社会学:都市研究と社会学理論』として丁寧にまとめた書籍を発表されました。本日はこの本に依拠しつつ、シカゴ学派社会学を経て、現代のオートエスノグラフィーにいかに関がっていくのかを考えていきたいと思います。

シカゴ学派社会学は、シカゴという町をフィールドに選んで非常に優れたモノグラフを蓄積した学派で、現代の都市社会学といわれる分野のルーツにもなっています。先ほど言ったようにここで用いられた方法としてギアツのエスノグラフィーもそうですし、ガーフィンケルのエスノメトソロジーだったり、 그레이ザー・ストラウスのグラウンデッド・セオリーだったり、様々な定性的方法がここで提唱されて開発されて、今にも受け継がれています。

このシカゴ学派社会学は大きく分けて3つの時代に分けられると言われています。

第1波で一番重要な研究と言われるのはトーマス・ズナニエツキ（1918-1920）が書いた、『生活史の社会学—ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』という本になります。私が博士論文で取り組んだライフヒストリー法の古典としても有名で、本当に分厚い上にすごく複雑で、何を言っているかよく分からなかったというのがいまだに本音です。

とはいえ、『生活史の社会学』では「社会的価値はある集団の成員に接近可能な経験的內

容をもち、それが活動の対象となり、またなりえるという点で意味を有する経験的所与のことである」(邦訳、21頁)と、実はギアツと同じ地点からスタートしています。社会的価値というのはある集団が歴史的に獲得し構築してきて、接近可能なものとして存在しています。そういう存在を対象として人は行動をする。だけどポーランド移民は、移民集団のもつ文化に基づいて行動が縛られていて、その結果、アメリカやドイツでポーランド移民のコミュニティができましたという話なのかというと、そういう単純な話ではない。ポーランドの移民がコミュニティを構築しながら、移民先で何とか生きられる状態を作っていく。作っていくのだけど、そこで出来上がった強固な社会的価値、生き残るためのポーランド移民としての規範というものが、実はその後、二世、三世と移民の世代が続いていくに従って、逸脱行動の原因になっていく。最終的にはポーランド移民の集団というものが自壊していくプロセスまで描いたことで、この『生活史の社会学』は定性的方法とかフィールドワーク全体の中でも最重要文献と見做されています。

ただしこの本は、1回、2回読んだだけでは、理解するのが難しい。難しいから、みんな一番簡単な理解をしてしまう。結果として、文化がある、社会的価値がある、ルールがある、規範がある、それと特定の行動類型を結びつけて理解するのがフィールドワークだという、通説的な理解が生まれてしまったのではないかと思います。

ある意味で、この誤解を助長してしまったのが1960年代から1970年代が第2世代ではないかと、私は考えています。この第2世代というのは、後々の展開を考えると非常に重要なのですが、この世代はウィリス(1977)の『ハマータウンの野郎ども』が代表作になると思います。ウィリスをはじめ、都市における民族、移民の問題と不良の逸脱行動の問題と、ギャングとかに注目したモノグラフシリーズが非常に大量に生産されて、黄金時代を迎えたのが第2世代です。

同時に、単純に職人芸として現場に赴いて取材をするだけじゃなくて、インタビューのための質問票の統一とか、聞き取りの作法のマニュアル化とか、データ集めの方法も洗練されていきます。洗練されていく中で、アンケートをばらまいて、記述統計的なデータを集めて、都市研究の基礎資料にしようという試みも同時に行われ、モノグラフとともに膨大なデータも集まりました。その膨大なデータの蓄積をどう処理するのかという、現代の計量社会学にも繋がっていくことになります。一方では計量社会学の基礎データになり、他方ではジャーナリスティック、非常にセンセーショナルな本として『ハマータウンの野郎ども』というヒット作が出てしまう。

この時期から、ジャーナリストのルポタージュと社会学者がフィールドワークで書くテキストの境界が曖昧になり、ジャーナリストがアカデミズムに参入したり、学者がジャーナリスティックに活動したりという相互乗り入れも増えてきたのではないかと思います。ある意

味、アカデミズムが一般社会に開放されたとも言えるわけですが、その結果として、ギアツとかズナニエツキとかウィリスとかの本を、「現場に真実があるのだ」と捉えていくような、先ほど言ったような単純な理解にも繋がってしまったのではないかと考えています。貧困の、不良の文化があるから、こういう逸脱行動をして、犯罪者になるのだと。実際、ウィリスはそう読めてしまう書き方をしてしまいます。そういう非常に不幸な誤解を生み出してしまったのが、第2世代の功罪だと思います。

1980年代以後の第3世代は、ミードの社会心理学やシンボリック相互作用論を吸収しながら、膨大に集められたデータとモノグラフに対して、改めてコアとなるズナエツキやギアツに立ち戻って理論的基盤を整備して発展させていこうとする、シカゴ学派の集大成に繋がっていきます。その完成形として言及される2人が、ゴフマンのドラマツルギーとガーフィンケルのエスノメソドロロジーではないかと思っています。

ゴフマン(1959)の場合、自分たちが生きているこの世界全体を、劇場として分析的に設定する。そこには、物質としての舞台としての生活世界が有り、脚本みたいなものもある。舞台上に立っている私たちは、この場で最も適切な役割というものを自分で取得しながら、父とか上司とか子供とか、期待される役通りに行動するだけではなくて、そこからちょっとずらして逸脱的な行動をする。演劇でいうとアドリブで自己呈示していくのだよと。そういうふうに舞台として社会を分析していけば、逸脱まで含めた秩序形成を理解できるというのが、ドラマツルギーの狙いだと思います。

ガーフィンケル(1967)のエスノメソドロジーの場合は、それをもっと細かく精緻に見ていこうとします。ギアツの目配せの例だと、何時何分誰に対してどのように、目の合図をしたのか。ある発話がこっちを向いてやってもその発話の意味内容は、全然違う人に出していている場合もあるかもしれない。だから、そこまで誰が誰に対してどのような発話というものを行って、秩序というものが形成されていくのかということを、ある種システマティックかつ偏執的に会話分析として捉えようとしたのがガーフィンケルのエスノメソドロジーです。エスノグラフィーと非常に似通った言葉なんですけど、手続きとか分析内容のやり方は違います。エスノグラフィーがどこかで記述のやり方を調べ方、聞き方を含めた職人技に見えるのに対して、エスノメソドロジーの場合はものすごく洗練されています。エスノメソドロジーだと、映像で録画してその人の身振り手振りが誰に向けられているのかという指向性まで全部秒単位で記録したりしますが、それがいいか悪いかは置いておきましょう。

第2世代はちょっと逸脱した部分、暴走した部分もありますが、シカゴ学派社会学に共通するのは、象徴とか舞台とか、トーマス・ズナニエツキの場合は状況設定と言ったらしいのですが、文化とかコードとかある種の理論的な抽象物というものを仮に置くことによって、自己呈示とか演技とか、他者への関与という集合的な行為として、社会が生成されていくこ

とを捉えてきたことです。逆に言うと、社会科学としての定性的方法論がずっと目指してきたのは、こういう記述のあり方でした。

もともと社会科学のフィールドワークが目指したのは何か。概念を指定することで、社会現象をあくまで私たち（研究者）が了解可能な形で読み解いていく。そこには当事者の理解と一致しているから正しいとか、そんなものを目指してはいない。あくまで私たち（研究者）が近代とかカリスマ、官僚制とか企業家という概念を指定、仮置きすることによって、この現象をわれわれはこう読み解けると書いて議論して、理論を発展させた先に、社会への理解が進み、良き社会が到来すると考えていくのがフィールドワークという企てだと思います。

4 社会への介入としてのフィールドワーク

私達がフィールドに臨む時、指定するものをどこに求めるのかというものの違いによって、フィールドワークはいろんな流派が分かれてしまうのだろうなと思います。

一つは、パーソンズ的なグラウンドセオリーを基盤にしつつ、現象を捉えて記述していこうとする形です。ひょっとすると、ギアツはこの系統なのかもしれません。

もう一つは、ミードから展開されたシンボリック相互作用論に依拠する形で、実際の現象では、どういう風に多様な行為が行われているのかと記述していこうとする形です。例えば、グレイザーとストラウス（1969）のグラウンデッド・セオリー的に現場との対話から帰納的に抽象化していく方法は代表例です。どちらにしても、フィールドワークで生み出されたテキストというのは、もうどこまでいっても決して現象そのものでもないし、当事者の理解ではない、研究者の営みとして書かれたものであります。

そもそも概念、理念型というものを想定するからこそ、われわれは時代も社会も超えた比較分析も可能になるわけですし、多様な実践への注目からその概念の差分を見出して新しい概念をクリエイティブに生み出していく形で理論が学術の世界で発展する。それは当然、巡り巡って政策などにつながっていったら、社会が変わっていく力にもなるだろうといえます。

そう考えていったから、（社会）科学的営みとして書かれたテキストそのものが、社会問題政策事例の介入実践だったというのが、特に「社会的実験としての都市」を強調したシカゴ学派社会学の第2世代の人たちが意識したことではないかと思います。

シカゴ学派社会学では、研究者が社会に参加してフィールドワークをやって、場合によっては当事者と一緒に論文を書くということを通じて、社会問題というものを可視化して解決していこうというような試みが行われていました。他方ではそのために研究者がジャーナリズムと相乗りする形で色々なメディアに接続していくことで、『ハマータウンの野郎ども』のように学術的なものだけど誰もが読めて、センセーショナルにいろんな人々に刺さり、人々の次の行動、社会を変えていく行動につながるような流通経路を獲得し得たともいえます。

特に第2世代は都市内の民族集団と逸脱への注目をしてきたので、貧困問題に対しては従来言われてきたマルクス主義に基づく構造的搾取という考え方に対して、あえて貧困の文化とか、エスニシティとか宗教の話をしていくことによって、多文化共生のような違うやり方で解決していくような運動の担い手にも研究者はなり得るということを目指しました。これがシカゴ学派社会学の目指した社会実験ではなかったかと思います。

そういう視点で、実は再評価すべきだと思うのが木下康仁(1999)のM-GTA、修正型グラウンデッド・セオリーだったりもします。例えばM-GTAだと、こういうカテゴリーで違和感ないですか、もし、修正があるのだったら、どういう修正があり得ますかと、実際に当事者の人に見てもらいます。M-GTAを積極的に利用している日本の看護学の場合は、看護師さんがそのM-GTAに基づいて自分たちで論文を書きます。これは共に、論文を書くというアカデミックな作業であるのとともに、一つの組織開発の手法としても利用されているからです。なので、実はグラウンデッド・セオリーというのは、当事者性というものを巻き込んだ上でのアカデミックなテキストの生産を可能にし、社会介入を果たしていく一つの方法としても、再評価できるのではないのでしょうか。

5 混合研究とフィールドワークの終末

ところで、フィールドワークをやっていると、「それはあなたの意見ですよ。あなたが見てただけですよ。客観的ですか？」というコメントをする人は、私が大学院生のときからいっぱいいました。これにどう立ち向かったらいいのかについて、私は大学院で博士課程に入ったぐらいからずっと悩んできました。

この悩みの、実に筋の悪い解決策として、これもやはり定性的方法論の授業で習ったと記憶している、法則定立と個性記述の二分法です。フィールドワークというのは個性記述、理論研究と統計的手法の組合せが法則定立だ、という棲み分けがなんとなく行われている。

実はこの棲み分け、経営学を含む社会科学の歴史で、ずっと繰り返されてきた手垢の付いた論法でもあるわけです。例えば経済史という学問は、実は理論経済学や計量経済学よりも先にありました。もともと経済学は、いろんな牧師の人とかが、各地に布教の旅とかに行ったときに、そこで見てきた風俗とか社会とか経済的な交換のあり方みたいなのを、モノグラフで記録して集めて、歴史的に分析し、記述していくフィールドワークからスタートしています。ところが、ある時イギリスから経済現象を数学的手法から迫る、古典派経済学というのが纏まって行って、イギリスの帝国主義的な経済発展を支える基本原理になってしまいました。その理論がシュンペーターを経てドイツに伝わっていく過程で、今までわれわれが実践してきた経済史と言われるものと、古典派経済学はどう折り合いをつければよいのだろうかという論争になってしまったのです。その時の論争の中で、経済史は個性記述で、ここか

ら生み出された概念は、法則定立型の計量経済学で検証してもらう、という棲み分けがかなうだろうとシュムペーター自身が言っていたりします。

そこから更に、経営史と経済史がさらに分離するときでも、同じような関係を言われて、経営史からまた企業家史が分離するときにも似たようなロジックが立てられました。中川敬一郎(1981)の『比較経営史序説』という本を読み込んでいくと、その分化していく過程でどういうふうに経営史が扱われていたのか非常によく分かる内容になっています。経済史から経営史、経営史から企業家史へと分かれるときにも、法則定立—個性記述の論争があったということも、昔のその時代の古典を読んでいくと分かったりします。

結果として、定性をやっている人間が理論や源泉の生みの親は俺たちだと言いながら、統計をやっているやつから「お前らは主観だろう」とずっとさげすまれて叩かれ続けているというような関係が、法則定立と個性記述の分業関係として展開されてきました。

普遍法則を追求する理論経済学と基礎データを提供する経済史、経営史、企業家史……と階層関係が形成されていく。先程お話したように、シカゴ学派社会学も第2世代のタイミングで、データの取り方がすごく洗練されていきました。洗練されていく中で、先ほど言ったようなアンケート調査とか、観察でちゃんと定量的にカウントでとっていくみたいな、現代の社会学部の人たちが社会調査論とか方法論の授業でやっているような社会調査の基礎的な方法というのがそこで誕生しました。そうすると、定量的なデータをフィールドワークから集めていくような方法が洗練されていくし、手法としても会話分析やネットワーク分析が発明されていったように、最終的には統計処理をとって相関を取ったり重回帰をかけたりというふうなことまで可能な形で、フィールドワークのやり方もどんどん洗練されていきました。

個性記述と法則定立の二分法から、手法が洗練され個性記述を定量的技法で包摂してしまうような試みが進められていくとどうなるのか。

例えば、この20年ほどの間に、法則定立と個性記述の二分法を前提に、ジャーナルに載せるためのテクニックとして、定性で見出した概念、発見事実、類型が妥当かどうかを統計的に処理して検証していく混合研究というのが広まっていきました。これはわが国でも、この5年ほどの間に浸透が始まりつつあります。

これは、定量の先生たちが査読者になったときに、定性の人たちが認めてもらうための一つの折衷案的に始められた混合研究が、ジャーナルの査読獲得ゲームの中でテクニク的に広まってしまった側面があります。とはいえ、混合研究を前提とすると、職人芸的な調査方法がもたらしてきた、フィールドワークそのものが持っている多様な実践を捉えようとしてきたダイナミックなところ、あるいは下手したら当事者まで参加してもらうことで、社会を変えていくような力を研究自体に持たせようとか、あるいはひょっとしたらジャーナル以外のテキストの流通経路を確保することによって、研究者が書いた物が社会に影響を与える経

路を確保しようとか、トータルの意味のダイナミズムというものが、どんどん失われていく可能性が出てきます。それを私は最近、フィールドワークの終末と呼んでいます。

このフィールドワークの終末への危機感について、先駆的かつ自覚的に議論をしているのではと最近見直しているのが、ヴァン・マーネン（1988）という経営学にも非常に縁の深い先生が書いた『フィールドワークの物語』です。この本では、フィールドワークをヴァン・マーネンがどういうふうを書くのかについて、写実的な書き方、印象派の書き方、告白体の書き方という3つの類型を示しています。

写実的な書き方とは、ペダンティックな形式主義です。ジャーナルの査読者とか、ちょっと極端な話が修士論文を書くときに、担当になる主査や副査の先生たちが、「学問だからこう書きなさい」、「できるだけ主観を交えず、客観的に見えるように書きなさい」と指導するような文体です。ペダンティックな形式主義にのっとって書くというのは、ひょっとしたら研究者として教育に基づいて、素直に書いたらそういう書き方になるかもしれないし、あるいはジャーナル投稿の際に査読者に叩かれ続けて、この人たちを納得させて、自分が書いたテキストをジャーナルに載せるためには、こういう形式を守らなければいけないのか、と学習していく書き方であると思います。

他方では、そういう書き方になったら、何も（理論も社会も）変わらない可能性がある。特に「こういう概念が先行研究にありました。フィールドではこういうふうに表示されています」と書いていく中で、フィールドワークから見出した、先行研究との差分がマスキングされてしまう。だとしたら、思いっきりその差分を生かすような印象的な書き方がありえます。例えば、現場の人たちの会話を書く。私の論文を見ていただいたら分かると思いますが、当事者の人たちがすごく象徴的に言い切っていた発話や、面白い例え話をしているところをあえて切り出して論文の中で使っています。

更に、私が見いだした発見事実、しかも先行研究の概念を変えなきゃいけないとか理論を変えなきゃいけないとか、仮説を変えなきゃいけないと読み手に強く感じさせるために、当事者の声だけではなく、筆者の驚きや反省を積極的に見せていくのが告白体のやり方です。これを私自身が一番極端にやったのが『国民経済雑誌』にも載っている「企業家研究のビッグ・ストーリー：方法としてのナラティブ・アプローチ」という論文で、当事者との会話から「私が驚いた」という書き方をしました。

たぶん、写実的な物語の書き方を忠実に日本でやっている方の代表例を上げさせていただくと、佐藤郁哉先生ではないかと思います。1984年に発表された彼の『暴走族のエスノグラフィ』という本は、本当に写実的に書かれています。実際に佐藤先生は暴走族の一員として、一緒に暴走行為をされたかもしれませんが、本としては、それぐらい距離を取っているように見えるし、研究書として自製の利いた形で書かれています。それは何故かという、

佐藤先生本人がコミットした調査を、論文として載せ、学術書として出版し、学术界で流通させていくために、本当にペタンティックに取れる手段を全部取って書いているからだと思います。その意味で凄く感心するのは、2008年に混合研究のための分析ツールの導入を勧める書籍を執筆されていることです。

ところが、はたしてこれはギアツの目指した厚い記述なのだろうか、あるいはシカゴ学派社会学が目指したことなのだろうかとも思います。確かに、佐藤先生は、シカゴ学派社会学がたどり着いた現在のフィールドワークの潮流である、混合研究を先んじて体现されているとは思いますが、そこに私は終末感を感じてしまいます。

実際に混合研究では MAXQDA とか Nitro がツールとして良く使われているのですが、私も最近触ってみたら、非常に便利でした。M-GTA 的にコードを付けてその間のつながりというのをビジュアル的に一発で図示してくれるし、比較するときも一覧でバツと並べて、コード順で入れ替えたりすることができます。更にすごいのが、映像的データ、音声データもタグづけしてリンクして分析できたりします。2022年の2月頃に、昨年亡くなった木村隆之先生と学会報告のために一緒に触ったのですが、最初は「二度手間の意味わかんねー」と言っていたのに、1週間経った後ぐらいから「これはすごいな」と唸りました。私達が勘とか職人芸でやっていたデータの分析を、ビジュアル的にもデータ整理的にも代行してくれます。特に複数人で共同研究するときに意見のすり合わせとかで非常にやりやすかった。どうしても定性的研究は職人芸の部分があるので、言語化出来ない意見のすり合わせをツールでコントロールできます。当然、このツールは混合研究を前提に設計されていますので、定量的な研究を信奉される先生たちとの相性は非常にいいです。データ収集から分析までの手続きが明確化されて、さらにこれを使うことによって、他の先生からの追試も可能になっていく。形式主義的な書き方に非常に適合したツールであると思います。

ただ、こういうツールの発展と混合研究が共に普及していくと何が起るのか。現場とラポールを構築し、職人芸的に話を聴く技術、書く記述が失われていくかもしれない。MAXQDA だったら現場観察で行ってインタビューしなくても、現場に定点カメラを置いていたらいいですよね。だって、映像の発言データに基づいてコードをつけて分析できますから。最終的には、研究者がその現場に行って話を聴くという意味すら、あやふやになってくる。

だとしたら、先ほど言ったシカゴ学派社会学第2世代以降が目指した社会的実験としての都市研究の社会実験とは何だったのだろうという疑問が出てきます。一つの、社会科学がウェバーから始まり、シカゴ学派社会学の形で長年積み重ねてきた一つの研究の型というのが、今は風前の灯火になっているのかなという。言い過ぎかもしれないけど、そういう状態になっているかもしれない。MAXQDA は便利だから、これを触ってみようと思ったりするかもしれないけど、これで失われていくものの中には、確実に大事な社会科学のコアがある

のではないかとと思っています。

6 反動としてのオートエスノグラフィー

このフィールドワークの終末に対して、もう1回、目指していた昔の地点に立ち戻ろうぜという動きは当然出てきます。そのひとつがオートエスノグラフィーと言われているものだと思います。この方法自体は2010年代に登場し始めて、2015年には鈴木裕之先生が『恋する文化人類学者』（世界思想社）を発表されたり、論文レベルでは看護学や教育学で利用されたりと、ムーブメントとして日本に比較的早くたどり着きました。

非常に幸せなことに、私が『婚活戦略』という本を出した翌年（2022年）に、この『婚活戦略』を書くために一生懸命、原著を読んだ、アダムスたち（2015）の『オートエスノグラフィー』の邦訳が出ました。それまで日本語で読めるのは、『質的研究ハンドブック』の第2巻のオートエスノグラフィーの章だけでした。これが、オートエスノグラフィーの書き方でオートエスノグラフィーを説明しているのだから、一見さんには理解できない。翻訳の出来がよくないのかと思って原著を読んでも、やっぱり分からない。ちゃんと初学者が理解できるように書かれている『オートエスノグラフィー』の邦訳が出たことで、これから挑戦する人が増えてくるのではないかと思います。

このオートエスノグラフィーは、混合研究を含むフィールドワークの終末という現状に対して、最も過激な方法を試みていると思います。

それが一番現れているのが、エリスたち（2000）の「オートエスノグラフィーにおける一般化可能性というものは、書き手の特異な経験を告白し、感情喚起を意図したレトリックを駆使したテキストを通じて、読み手にその経験を追体験しつつ、自身の経験、知識と照らし合わせた内省のうちから獲得される」（p. 137）という記述です。

一般化とは、定量的な方法でも、ひょっとしたらエスノメソトロジーとか会話分析とかネットワーク分析でもいい、あの辺の方法論は、一般化可能性とか客観性は調査や分析の手続きに担保されています。ちゃんと適切なデータを集めているか、第三者が確認可能な手順に基づいて分析しているのか、それに基づいた形式で記述されているのかによって、客観性が確保されて、その論文の結論は一般化の可能性があると判断される。

それに対してオートエスノグラフィーはそんなものを目指してない。いかに読み手に追体験させるのかを目指します。例えば私の『婚活戦略』を読んだ人は男性の方には、「これは俺や」とツイッターとかで言った人が結構多かった。それに対して女性の方は、「当然だろ」って反応と、「こんな私が無自覚にやっていったことを目の前で見せられるとキツイ」という反応が返ってきました。これはさっき言ったギアツやシカゴ学派社会学のコアにつながります。ギアツは合法性近代化統合化とカリスマ構造、意味などの重要な概念にはっきりと

した現実性が与えられると言いました。それを目指し、立ち戻るために、ギアツが目指したことを先鋭化して、私が体験したことについて書いているもののレトリックに注目し、どのようにみんなに伝えるのか、伝えることでどうやって議論を巻き起こすのか、そういうことにこだわっていくのがオートエスノグラフィーのたぶん一番の特徴です。これをやれなかったら失敗で、一般化の可能性がなくなっていると言ってもいい。

形式主義的なフィールドワークや混合研究を進めるに当たって、MAXQDAはツールとしてはすごく便利です。だけど手続きの洗練は一般可能性を学術的に担保していくもので、あくまでそういうものでしかない。

ところが、この手続きという話をまた煎じ詰めていくと、その手続きのもとでトレーニングを受けた研究者は、この形式主義的な書き方にリアリティを感じているのだよね。だけど他の読み手、例えば本屋で本を手にとった書店の普通の大学生は、会社員は、その手続きにリアリティをどこまで感じるだろうか。統計とかに慣れ親しんでいる学生とかマーケティング的な仕事で、アンケート処理とかしているような仕事をしている会社員は、そこにリアリティを感じてくれるのかもしれない。だけど、皆さんのおじいちゃんとかおばあちゃんでもいいよ、アカデミックのあの字も知らないような人がその論文を見て、リアリティを感じるだろうか。あるいは政策の立案とか実施に関わる人間でいうと、行政職員とかあるいは政治家の先生とかがそれを見たときに、その手続きにリアリティを感じるだろうか、という問題になってくる。先ほど言ったように研究者はあくまでも分析の手続き的な部分に対して、リアリティを感じて一般化の可能性を見出している。逆にリアリティを感じさせることが鍵だとしたら、多くの人に、あるいは自分が狙ったターゲットの人にカスッと刺さるようなレトリックの磨き方というのが絶対にあるはずだというのが、オートエスノグラフィーの一般化問題に対する主張ですし、法則定立と個性記述の二分法への回答だと思います。

一般化とは著者と読者の関係からリアリティとして生じるもので、だとすれば極端な話で言うと、手続き的に担保された論文は、他者に刺さらずに、語られもしなかったら永遠に一般化されることはない。私は最近よく言っているのですが、学会賞を取った論文や書籍って、いったい何人に読まれている？ 組織学会だと全会員で数千人でしょうか。その中で常に学会の大会に出ている人は数百人くらいかな。学会誌を隅から隅まで読んでいる人は、と考えると高宮賞受賞論文の読者は実は数十人くらいかもしれない。そこにはリアリティが発生している？ それは研究者だけの主観ですよと言いつけられたら、もうどうしようもないよね。この論文は学会賞を取った素晴らしい論文であると言い張っても、学术界以外の誰が読んでもしリアリティを感じられないなら、あなたの主観、せいぜい研究者コミュニティの狭隘な理解に基づく主観ですよ、と言われたら終わりです。

オートエスノグラフィーという試みは始まって時代が浅いので、まだまだ発展途上の部分

があります。もしこれで書こうとしたときは、リアリティを獲得するために、最低でも感情へのリーチと議論の喚起、メディアの拡張という、この3つを意識しないと、オートエスノグラフィーにならない。逆に言うと、当事者の立場から真実性を担保にして、当事者の世界を書いたのだと強調すると、最初に言った「これこそが私が現場で経験した文化だ!」と書いてしまう、悪しき誤解に基づくエスノグラフィーもどきになりかねません。

7 オートエスノグラフィーのレトリック

自分自身の経験も対象化して、再帰的に振り返るテキストの記述から、社会現象を自己と他者の相互行為によってもたらされる深い理解として記述していくことがオートエスノグラフィーの説明として紋切り型に使われます。

この紋切り型の表現の前に大事なことは、オートエスノグラフィーは、研究者自身も実は社会に生きている当事者であるという原点に立ち戻ることだと思います。社会につながる延長線上じゃないと、経営学に限らず、社会科学全体の研究テーマは発生し得ない。みんながわが事の経営の問題があるから、経営学という学問が成立する。だとしたら、研究者は中立的な存在で、客観的な研究活動しているといった態度はありえない。それを改めて引き受けよう、そこに責任を持とうというのがオートエスノグラフィーの考え方です。

そうすると、オートエスノグラフィーについて特に独特な部分は、現場性をどう利用していくのかということではないかと思います。私は『婚活戦略』を出した時に「これは本当?」とよく読んだ人から言われました。「本当にこんな目に遭ったの」と言われたら「本当だよ。疑うならやってみろ。同じ目に遭うから」と私は必ず言います。でも実のところ、この対話も私にとってはレトリックでしかなく、当事者しか知り得ない情報というものは、実はオートエスノグラフィーにとっては武器であるけど、そこに依拠しているわけではない。

例えば告白体の記述としてそういう本人しか知り得ないことを記述していくのは、確かにレトリックとしては非常に有効です。『婚活戦略』が学術的に注目されただけでなく、結構売れちゃった原因は、私が生々しく告白する文体で書いたからです。それは、多くの人たちに刺さる。でも私は刺すのが目的であえてそういう書き方をするのであって、その当事者であることを振りかざして、私が言っていることは正しいと認識させようとするのは、オートエスノグラフィーとしては、ちょっと違います。

むしろ、その書き方そのものに、私が現象から学んで理論的に考えたことを追体験できるように、書き方にいろんな角度をつけています。当事者性そのものは、読者を「刺す」ための担保にはなっているかもしれないけど、そんなに重要視してないというのが、実はオートエスノグラフィーの全体に共通することかなと思います。逆に言うといかに表現に角度をつけて、どういう風に刺さるように書くのかということが、オートエスノグラフィーの人たち

が一番意識する部分ではないかと思います。エリスたち（2000）は、そのためには手段を選ぶと書いています。小説だったり、ルポルタージュだったりポエムだったり、あらゆる手段を用いて、読み手の感情を揺さぶって、著者の思考を迫体験させる。著者の経験を感情とともに迫体験させていくことで、議論の手がかりを掴んでいく。だからこそ、私は「疑うならやってみろ」と、他人には取えて言っていたりします。

そういう意味では、オートエスノグラフィーというのは、当事者の体験という書き方もレトリックな可能性もある。そういう意味では、本当に過激な言い方をしますが、私は現場性を信奉していない。でもよく考えたらそうだね。ズナニエツキの時代から、現場に行くけど、解釈は研究者のものだよね。当事者たちの解釈を明らかにしているのではない。もちろん、現象も当事者の行為もとても注目している。現場の人達に、それをなぜそうしたのかは聞きます。でも、それを聞くのは、自分の解釈を生み出すためです。オートエスノグラフィーの考え方は、そこから一步踏み込んで、その解釈をいかにみんなに刺さるようにどう書くのか、どうリアリティがあると思わせる書き方をするのか、ということです。

これは『婚活戦略』事例の一箇所を抜き書きしたものです（図1）。ここからは私が手段を選ばずに、どうやって、読者を「刺した」のかについて説明させていただきたいと思います。

シチュエーション的に何とか婚活パーティーでマッチングできて、2、3ヶ月交際して、クリスマスにフラれるという話です。もういろんな人が、この部分をスクショでとって

図1 「増大するあなたの価値、無力化される私 婚活パーティーにおけるフィールドワークを通じて」の記述

2ヶ月ほどのお試し交際期間が過ぎ、お互いに打ち解けた会話ができるようになったという感触を得た段階で、正式に結婚を見据えた交際を申し込む段階になった。婚活であるため、可能な限り早く結婚への意思を見せることも、男性側に求められるのである。意を決して、結婚を見据えた交際を申し込んだ筆者に対して、女性の回答は予想を超えるものであった。

女性：言い出しにくかったのだけど、ちゃんとした交際はやめておきたい。

筆者：えっ、なんで？

女性：この二ヶ月、すごく大事にしてくれたし、いろんなところ連れて行ってくれて、気も遣ってくれて嬉しかったし楽しかった。そしたら、こんな私でもこれだけ大事にしてくれるって自信がついたし、だったらもっと若くて上の人と恋愛して結婚するのを狙えるなと思っちゃって。だったら、あなたとは無理に付き合わなくてもって思ったの。

この回答に、筆者は何もできず、女性の希望通り別れるという選択しかできなかった。彼女は筆者に不満や不足を感じた訳ではない。むしろ、大きな満足を得て、女性としての自信を得たから、より良い結婚の可能性を追求すると筆者に突き付けたのである。

はツイッターで挙げてきて、未だに私の心を抉ってきます。論文でこれを書いているときは、まだ、経営学の事例として書いています。ちょっと色つけすぎかなとは思いますが、論文的に写實的に書いています。ちょっと注目してほしいのは、フラれたというところで終わっている点です。7歳ぐらい年下の女性だったのですが、「同じ年の若いイケメンと付き合いたいから別れてください」とクリスマスイブに言われたという話を、ちょっと距離をとって書いています。これはなぜかという、学会誌だし事例記述として違和感を持たない程度に印象的な書き方をしたかったからです。さらに言うと、最近アカデミック構文という言い方をしていますが、経営学に限らず、学問は独特の文章の書き方があるじゃないですか。あれは一種の圧縮言語です。学会誌の論文は文字数制限がありますので、学会誌に掲載するにあたってすごく便利だったから、私はこの段階では、形式主義に近い書き方をした訳です。

同じ場面が書籍版の『婚活戦略』になったらどうなるかという52ページから53ページにかけてになります(図2)。是非、本を実際にお手に取って詳しく見ていただきたいのですが、本当に悲しくなると言われています。

ここだと、どれだけ自分が悲しかったかを説明するために、出会いから12月24日に至るまでに私が彼女に惚れてもらうために、どれくらい無理をしたのかという記述を入れています。アウトドアとかスポーツが好きだけど、彼女は美術館巡りが好きだと。私は全く美術に関心がないのだけど、それに付いていって一生懸命に彼女をエスコートしてみたいなことも書いています。しかも論文には載ってない情報として「婚前旅行で沖縄旅行をして、帰り道で私の実家に寄って親に紹介する」という話を記載しています。要はここまで私は苦労しながらも楽しく彼女とデートして、確か24日の1週間前の17日の段階では沖縄旅行を計画して、私の入試業務が終わった後の2月に親に挨拶に行くかみたいな話ぐらいまでになっていますよ、という前情報をガッツリ書く。

なぜかという、読者について結婚するかと思わせるために書く。そこまでの私の感情の盛り上がりを読者に体験させるためにこれを書いて、その次に出てくる彼女の言葉は、今回は「言い出しにくかったけど、ちゃんとした交際をやめておきたい」で一旦切っている。

なぜ、切っているかという、ショックを演出したかったからです。ここまで私は頑張った。ついに彼女と一緒に旅行へ行行って、親とも会ってくれるという状況になっていて、次のクリスマスイブデートとなったら、読み手としても私としても、一番盛り上がっているところだよ。そこに、いきなり彼女から「やめておきたい」と言われる。ウキウキのところからショックを出して、さらにそこから追い打ちをかける彼女の理由を書くというふうな書き方です。実はこれでも、まだ硬かったかなと思っているけど、そう意識して書いています。

更に注目してほしいのは、論文版は彼女からフラれたところで終わっていますが、書籍版はダメ押しで「イケメンのI先生を紹介して」と言われるシーンが入っています。論文版の

図2 『婚活戦略』の記述

実は、私の趣味（アウトドア・スポーツ）と彼女の趣味（美術館・カフェ巡り）は著しく異なっていた。そのため、私はまずは彼女の希望を尊重し、意見を聴きつつ普段は行くことがない美術館の特別展示企画やおしゃれなカフェやレストランと一緒に出かけるという行動、月2～3回の頻度で繰り返していった。ここで最優先したのは、とにかく彼女に楽しんでもらうことだった。2ヶ月ほどデートを繰り返しているうちに、入試業務が終わる年度末に、一緒に沖縄旅行に行くためのスケジュール調整や、宿泊するホテル選びをする程度には、打ち解けた関係になっていた。実際に旅行に行く前に、ちゃんと関係をはっきりさせたほうが良いだろう。12月にはいる頃には、私はそう考えるようになった。婚活パーティーで出会った関係である。可能な限り早く結婚への意思を、私が見せる必要がある。彼女は事あるごとに、結婚したいと言いつづけていた。少なくとも、一緒に沖縄に旅行に行こう、と具体的な予定を立ててくくらの関係にまで発展しているのだ。断られるはずはない、と意を決して、結婚を見据えた交際を申し込んだ。

「言い出しにくかったのだけど、ちゃんとした交際はやめておきたい」

結婚を前提とした交際の申し出に対して、少し考え込んだ後の、彼女の解答は全くの想定外だった。

「この二ヶ月、すごく大事にしてくれたし、いろんなところ連れて行ってくれて、気も遣ってくれて嬉しかったし楽しかった。そして、こんな私でもこれだけ大事にしてくれるって自信がついたし、だっただらもって若くて上の人と恋愛して結婚するのを狙えるなと思っちゃって。だっただらあなたとは無理に付き合わなくても思ってたの」

しかし、これで終わりではなかった。彼女は私が想像することも出来ない、更に斜め上にかっ飛んだことを言い出した。

「それでさ、この前、高橋さんが見せてくれた写真と一緒に写っていた先生、紹介して」

確かに10日ほど前、私は釣りに行った時の写真を見せていた。その時に一緒に釣りに行ったのは、私が学部生の頃から研究指導を担当し、現在は都内の大学で専任教員として勤務しているI君だった。当時の年齢は、ちょうど私と年齢が一周り下になる32歳。少なくとも、私より遥かにイケメンの独身男性だ。

「いや、それ無理だわ」

私はそう答えて、席を立てた。彼女が何を考えているのか解らない、そう思った。自宅に帰り着いた頃に、じわじわと悲しみと怒りが湧いてきたが、彼女の意図がわかるに依り、怒りも悲しみも、全ての感情が無に帰っていったのを憶えている。

彼女は、私に不満や不足を感じた訳ではない、むしろ、大きな満足を得て、女性としての自信を得た。都内だけでも毎日数十件、婚活パーティーは開催されている。そこには、必ず目の前にいる私より好条件の男性が必ず参加している。32歳の彼女にはまだじっくりと配偶者を選ぶ時間の猶予が残されている。だから、より良い結婚の可能性を追求すると筆者に突き付けたのだ。

そして、つい10日前まで恋人同然の付き合いをして、年度末には旅行に行く約束をしていたとしても、正式な交際を断ってしまえば私はただの友達だ。だったら、私の友人であるI君を紹介してもらって当然、そう考えたのだろう。

「女って、怖いな」

10日前。私は、釣りに行った時の写真を見せた時、彼女がI君と一緒に写っている写真に妙に食いついていていたことを、今更ながら思い出していた。

ときは価値評価研究のロジックと文字数制限の関係から、ダメ押しは蛇足になるから入れなくていいと思いました。「婚活で自信つけたからあなたと付き合う必要はないと思った」というのと、「よりイケメンと付き合えと思ったので、I先生を紹介してください」という話は重なるし、ロジック上は意味がないと思って論文版ではバッサリと切りました。

それでも私はこの後、先ほど言ったように、価値評価研究とか制度論の視点から見たときに浮かび上がってくる婚活市場のもつ独自の力学と、女性がどのようにその力学を利用して、良い結婚するためにどういう行動をするのか、特に突飛な行動も平気になれるようになることを、徹底的に読んでいる人に見てもらいたい。そのためには、どれだけ私は酷い目に遭ったのかということを見せながら、特に男性読者の人に対しては、絶望のどん底に落ちてもらわなきゃいけない。そして女性には、私はこんなことはしたくない、と思わせなきゃ駄目だと私は思いました。だから、この後のダメ押しを入れました。

もう本当に言葉にできないくらい落ち込んでいる状態で、予想外の斜め上のことを女性から言われる。「この前写真に一緒に写ってた先生を紹介して」と。しかもこの先生と一緒に遊んでいる釣り仲間なのだけど、実は私の弟子なの。それでショック2乗という。

更に表紙にも、そういう自分のフィールドワークから得た結論が表紙で伝わるように工夫をしました。普通は研究書の表紙は文字だけとか幾何学的な図形を書いているレイアウトの研究書が多いと思います。中央経済社の編集者と相談する中で、いろんな人が手取りやすいようにイラストを入れるという話になって、「だったらこういうイラストを入れてください」と私が言ったのが、この本の中で男性が指標で並べられて、比較されて、その比較の中で自分の年収とか仕事とか学歴とかあるいはルックスとかというものが、どんどん無価値化

図3 婚活戦略表紙



されていく中で、女性にすごく厳しい目で見られるというイラストです（図3）。

結論の部分で私は、婚活は女性がウインドショッピングを楽しんでいるようで、男はショーケースに並んだバックでしかないのだということを言っているの、それにあわせた絵をということで、3人の男の人で、イケメン、イケメン、で一番端っことは私、外で女性が思案顔で見ているというイラストを発注して描いてもらいました。裏には、それに対して男性がどういう行動をするのか、ということの、ある意味私が本の中で書いた結論を象徴するようなイラストにしているという仕掛けまでしています。なので、一通り読んで内容を理解した人は表紙と裏表紙を見て、衝撃を受けています。どんな裏表紙かせび確認してください。

8 研究を流通させるメディアをどう利用するか？

ということで、オートエスノグラフィーでやろうと思ったらここまでやらなきゃいけない。ここまで書いてしまうと定量ベースの研究者の人も、方法的な手続きのところをすっ飛ばした上で、リアリティを感じてしまう。「こういう社会があるのか!」ということを感じさせてしまうことができます。オートエスノグラフィーは、覚悟を持ってここまでやらなければいけない。大学院生がやっていいかどうかはとりあえず置いておいて。

ここまで覚悟してオートエスノグラフィーとしてやろうとしたときに、必ずみんな共通して言っている恨み節があって、一言でまとめると学会誌に載らないということです。感情を喚起させてテキストを意図的に書くことで、研究者を含んだ読者間の論争をいかに喚起させていくのか。論文を書くことをコミュニケーションと捉え直して、社会に介入する足がかりを作っていく方法論がオートエスノグラフィーなんですけど、そこで先駆者達が言っているのは、それやると査読付きジャーナルにはなかなか掲載されないということです。

自分が書いたものが、人に読まれて語られて初めてそこでリアリティを獲得すると考えたなら、査読を落ちている時点で敗北です。だから、発表媒体がないというのは、オートエスノグラファーとして大問題です。しかも、現代のフィールドワークをやっている人たちは、定性と言いながら、ネットワーク分析でバリバリ定量の論文が載っていたり、会話分析でバリバリ定量的な処理をしている論文を載せていたり。グラウンデッド・セオリーと言いながら、最終的には先ほど言ったように、最後に定量的な処理をして、抽出したカテゴリーは正しかったです、統計的にも検証されましたという混合研究の形式に乗っ取っていたりね。

しかしながら、ジャーナルに掲載されることだけが研究活動の全てなのかは、ちゃんと考えていかねばならないと思います。大学の先生としてのキャリアを、ポストを獲得しようとしたらまさしくそれは重要です。私自身もどこかのタイミングで、査読付きジャーナルに載せるゲームに乗って勝たなきゃいけない。しかし、とりわけ日本の動向として顕著だと思いますが、自分が論文として書いたものを、研究としてやってきたことを流通させる経路は学

術誌だけだったのか、ということは、改めて考えなければいけない。今、とりわけ私の同世代から下の30代ぐらいの若いフィールドワーカーの活動を、社会科学全体に広げて見ていたときに、メインフィールドとして選ばれつつあるのが実は書籍だったりします。

実はこういう視点で見ていくと、オートエスノグラフィーに限らず、フィールドワークで定性的方法をやっている人にとっては日本の出版業界は、とても恵まれていることに気づくことが出来ます。

近年の注目作を見ていくと、佐々木チワワ（2021）の『「びえん」という病：SNS 世代の消費と承認』は、表紙を見ただけでトー横キッズの研究というのが分かります。打越正行（2019）の『ヤンキーと地元』は、タイトルが斜めになっている。これはヤンキーが落書きするとなぜか、全部斜めだからですね。知念渉（2018）の『「ヤンチャな子ら」のエスノグラフィー：ヤンキーの生活世界を描き出す』は、表紙から完全にヤンチャな人が全面に出ています。水野英莉（2020）の『ただ波に乗る Just Surf: サーフィンのエスノグラフィー』は、ちょっと波に乗りかかっているみたいな写真の表紙が、実はサーフ文化はこういう人達に支えられているのだという、この本のテーマに繋がっている。最近の社会科学の若手の方は、みんな、書籍という流通経路を上手く使っています。

更に出版社も学術出版社だけとは限らない。2017年に発表された『裸足で逃げる沖縄の夜の街の少女たち』という書籍を発表された上間陽子さんなんかは、女性のDVの問題と、若年層から続く売春とかセクシャリティーの問題について沖縄で起こっていることを、太田出版から出されています。これは出版社の選び方を含めて、非常に戦略的だなと思います。こういうセンセーショナルで、だけどちょっとアカデミックな匂いのするやつを、読み物のノンフィクションとして出すのが得意な出版社が太田出版だったりします。

実際に、こういう本を出すときの出版の交渉の話をしておきたいと思います。まずは皆さんが大学院生活を順調に進めて博士まで行って、先生に運良くなれて、博士論文を本で出そうとしたときの典型的な交渉から話してみましょう。私が『制度的企業』とか『ソーシャル・イノベーションを理論化する』を出した出版社の交渉の話になりますが、「授業は何コマで受講生は何人いるのですか」と聞かれます。これは、例えば200人の授業だったら、1000刷ったら全員に買わせたら5年で消える、売り切れるという計算をするためにそういうことを聞きます。あとは「それは教科書指定できますか」、「何校で教科書として採用されるあてがありますか」、「出版助成は取れますか」ですね。特に、出版助成が取れてなかったら、出版の話はなかなか進まない。

ところが『婚活戦略』のときは、こういうのがなかった。だって、『婚活戦略』は授業で教科書指定は無理です。私のビジネスイノベーションか、ベンチャービジネス論の授業でこんなのは指定できない。出版助成も取ってない。それでも、とにかく早く出したい。似たよ

うなことを書いているやつは絶対にいるからと思って。なぜ中央経済社に持ち込んだのかと言うと、私が研究指導していた静岡文化芸術大学の曾根秀一先生が博士論文を、出版助成を受けて中央経済社で出版した直後だったのですね。そのときの担当者に、私が師匠パワーを使って会わせてもらいました。曾根先生に「編集者に、すごい人が居るからって紹介して」と。それで浜田さんという編集の人に、メールでいきなりゲラを送りました。その後、1週間ぐらいたって、「とても面白いから、出版にもっていきましょう」となりました。

この時点でもう授業で何コマ持っていますかとか、何人受講生がいますか、という話は一切なかった。その後の打ち合わせは全部出版前提で、正式に決まるまでは出版社で何が起こって、浜田さんがどう頑張ったかは私も知らないのですが、「どのジャンルで売るのがちょっと悩んでいるので、ご相談させてください」とか、先程の表紙の話とかもそうなのですが、「もう少し一般の読者の方にリーチするために、〇〇してください」という話しかしません。

他方で最初に言われたのが、「とても面白いけど、あまりにも自虐が過ぎて読んでいる人が嫌みに感じるかもしれない。本当に嫌だと思うかもしれないから、この辺の表現を丸めてください」とか、「女性を敵に回す表現がここにあるので、それはやめてください」とかというのがメインでした。本当に最後の段階で、「社内で稟議を通さなきゃいけないので、形の上だけでいいんで、受講生が何人ぐらいいるかだけを教えてください」と言われました。

つまるところは、この本は研究書ですよ、博士論文を本にするのですね、というアプローチで入ったのか、編集者の人に出してみたい、売れるかもしれないと思わせるような原稿を書いて持ち込んだのかの違いで、実は同じ学術出版社でもこれだけ対応の仕方が変わってきます。それぞれの出版社の編集のなかには、これはもともと研究ベースだけど、ちょっと書きぶりを変える、ちょっとパッケージを変えるだけで、一般の人にも研究の世界の人たちにも両方にリーチできる本になると思う編集者が絶対にいるはずですよ。

だったら最初から学術出版ではなく、商業出版を狙えばよいのではという話になるのですが、彼らのビジネス・モデルを含めて考えると、実はハードルが逆に高くなります。

昨年、クロスメディア・パブリッシングさんからビジネス書を出させてもらったり、集英社のサイトで出版を目指した連載を経験して改めて分かったことですが、実は商業出版の方が学術出版よりハードルが高かったりします。

なぜかという商業出版はスタートが5000部なのです。逆に言うと5000部売り切れるだけの著者じゃないと、そもそも交渉のテーブルに編集の人がついてくれない。私のビジネス書の場合、なんで向こうからのオファーでトントン拍子に出版が実現したのかというと、その前に『婚活戦略』が学術書として異例に売れた、重版を重ねたという実績があったから。ただ、それだけです。だから皆さんがいきなり、オートエスノグラフィーですごいエッジの

効いた理論的にも、記述的にも面白い原稿を書いたとしても、いきなり太田出版に持ち込んで、出版してもらえるということは、めちゃくちゃ運が良くないと多分無理です。本当に嫌な話ですけど、出版社の編集の方と話をしていたら、某社の場合だと「ツイッターのフォロワー3万人以上になってから来てください」と追い返されたりします。その原稿がとても面白いと思っても稟議が通らないから。実際、私もアプリの本の企画書を見せてもらったときに、今この分野で一番話題になっている先生が書くから、ある程度売れるはずというのが実際に企画書の中で書かれていて、稟議書でハンコを押すという形になっていました。

なぜ学術出版のハードルが低いかというと、出版助成をカマして損をしない構造を出版社側が作って、1000部売れたらいいと判断するからです。1000冊なら、著者が頑張って手売りしたら売れそうな冊数でもありますし、ちょっと話題になっただけで売り切れて、そこから重版がかかったら出版社は儲ります。だから、実は学術出版の方が出版へのハードルが低い。出版社の規模も商業出版と比べたら学術出版は規模も低いので、1000部で儲かるように、損をしないようにビジネスを設計するので、出版市場の中で無名の著者でも出しやすい。

とはいえ、その中で学術書が少しでも売れて、一般の人にもリーチして、学会の中以外にも話題になる状況になったときには、こんどは商業出版社の方がアプローチしてきて、それを利用して色々面白い仕掛けを研究を絡めて進めていくことも可能です。

私の経験ですと、まず『婚活戦略』を読んだ集英社の文芸担当の編集者の方からオファーを頂き、Web媒体で「そこそこ起業：異端の経営学者が教える競争せず楽に生きる方法」(<https://yomitai.jp/series/yurukigyou/>)という連載を始めました。この連載は2023年の3月で一応は終わったのですが、書き下ろしを加えて書籍として発売するというのが決定しています。この連載は、一見エッセイに見えて、ライフスタイル企業家のフィールドワークもやりながら、ライフスタイル企業家の理論的な先端の話というものをちゃんと紹介して行くものです。ある意味、私の研究活動を商業媒体でエッセイの形で連載したのですが、それが逆にウケけました。記事ごとに、それなりのアクセス数がちゃんとあったらしくて、初版5000か6000は超えられるだろうと判断してもらえたみたいです。

この「そこそこ起業」の中で「異端の経営学者が最果てのゲイタウンで考えた」という話を去年の7月に出したのですが、この話をめっちゃ気に入ってくれた編集者の人から執筆依頼がきて、制度派組織論、価値評価研究に基づいた新書としてNHK出版から『アナーキー経営学：街中に潜むビジネス感覚』という本を出すことになりました。というぐらい、実は1回、ハードルの低い学術の方で、うまく刺さるように書いて転び始めると、商業の方でも全く無名だった私でも、こういう展開が可能になります。

そういうやり方で本を出して、それを足がかりにしてフィールドワークが可能な研究環境を作ったり、作家として飯が食えるポジションを手にしたたり、最終的にはアカボスを獲得し

ていくということも含めて、実は経営学以外の分野の若手の人たちほど、自分をどうプロデュースしていくのかを出版に絡めて真剣に考えているのが現状だったりします。実際、こういう形で研究を流通させる経路を開拓した上間さん、知念さん、打越さんは、この分野で非常に有名な研究者になり、アカボスも得ています。佐々木チワワさんは、まだ大学院生ですが、今は在家の研究者としてこの分野でもあちらこちらで原稿を書いているというぐらいになっています。

こういう、大学で研究して査読付き論文を書いてアカボスというルート以外にも、研究発表する道もあるし、研究者として活動していく方向性というのも、実はいろんな形でありうるだろうと思います。

最後に、私が今、挑戦しているのは、日本の恵まれた出版環境を利用しながら、自分がやりたい研究をやりつつ、それを商業パッケージも含めて本としてうまく流通させて、研究者としての活動範囲を広げていくというものです。

実際に私がこの3、4年の間で経験していることは、商業と学術の隙間を、ロジックをまさに混合させて、実は研究書だけど一般でも読める、完全に商業出版のパッケージだけど実は学術になっているみたいな書籍に市場を見いだそうとしている編集者が、商業にも学術の出版社にも両方に沢山いることでした。逆に、経営学者が商業出版と言うと最初に考える教科書市場とビジネス書は、オワコン化しつつあると危機感を持っている。だとしたら、そこに私も研究者として、新ジャンルのパッケージの本を企画提案して、出版まで持っていく。研究助成も出版助成も、時に印税や講演料まで、いろんな形でお金をもらいながらフィールドワークできる状況を作り、学術と商業双方で研究の流通経路も増やしていったら、研究者の仕事としても、質も量も広がりを持っていくということを今やっています。

フィールドワークをやりながらこういうことが狙えるのも、やはり日本の出版環境が非常に恵まれているからだと言えます。本屋さんがこれくらい身の回りにあって、コンビニに行っても普通に雑誌がある。単行本や小説とかも置いている。そんな環境は世界中にほとんどないです。初刷り1000部ぐらしか刷れない、限られた財務能力しかないような1人出版社でもばんばん起業できるぐら이의出版環境があるのが日本です。それは世界ならあり得ない、凄く恵まれた環境です。そう考えていくと、うまくその状況を利用して、出版を含めて自分の研究を流通させる戦略まで考えていかなければいけないよ、と今なっているのが、フィールドワーカーであり定性的方法論の研究者の世界ではないのかと考えています。それについては、次の次の本ぐらいで、『出版のオートエスノグラフィー』みたいな本を書いて皆に伝えられたと考えています。

参 考 文 献

- Adams, T. E., Jones, S. L. H., and Ellis, C., (2015). *Autoethnography. Understanding Qualitative Research*, Oxford University Press (松澤和正・佐藤美保訳『オートエスノグラフィ：質的研究を再考し、表現するための実践ガイド』新曜社, 2022年).
- Ellis, C. and Bochner, A., (2000). "Autoethnography, personal narrative, reflexivity", in Denzin, N. K. and Lincoln, Y. S., eds., *Handbook of Qualitative Research*, second edition, Sage Publications, pp. 733-768.
- Geertz, C., (1973). *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*, Basic Books (吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳『文化の解釈学(1)』岩波書店, 1987年).
- Garfinkel, H. (1967). *Studies in ethnomethodology*, Paradigm Publishers (山田富秋訳『エスノメソドロジー：社会学的思考の解体』せりか書房, 1987年).
- Glaser, B. G., and Strauss, A. L., (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*, Aldine. (後藤隆・水野節夫・大出春江訳『データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか』新曜社, 1996年).
- Goffman, E. (1959). *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday (石黒毅訳『行為と演技：日常生活における自己呈示』誠信書房, 1974年).
- Thomas, W. I. and Znaniecki, F. (1918-1920). *The Polish Peasant in Europe and America*, University of Chicago Press (桜井厚訳『生活史の社会学：ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房, 1983年).
- Van Mannen, J. (1988). *Tales of the field: On writing ethnography*. University of Chicago Press (森川涉訳『フィールドワークの物語：エスノグラフィーの文章作法』現代書館, 1999年).
- Willis, P. E., (1977). *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs* (熊澤誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども一学校への反抗・労働への順応』筑摩書房, 1985年).
- 上間陽子 (2017). 『裸足で逃げる：沖縄の夜の街の少女たち』太田出版.
- 打越正行 (2020). 『ヤンキーと地元：解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』筑摩書房.
- 木下康仁 (1999). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生』弘文堂.
- 桑田耕太郎・松嶋登・高橋勅徳 (2015) 『制度的企業家』ナカニシヤ出版.
- 佐々木チワワ (2021). 『「ぴえん」という病：SNS 世代の消費と承認』扶桑社新書.
- 佐藤郁哉 (1984). 『暴走族のエスノグラフィー：モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社.
- 佐藤郁哉 (2008). 『QDA ソフトを活用する実践質的データ分析入門』新曜社.
- 鈴木裕之 (2015). 『恋する文化人類学者：結婚を通して異文化を理解する』世界思想社.
- 高橋勅徳 (2020). 『増大するあなたの価値、無力化される私 婚活パーティーにおけるフィールドワークを通じて』『日本情報経営学会誌』, 第40巻, 第1-2号, 201-215頁.
- 高橋勅徳 (2021). 『婚活戦略：商品化する男女と市場の力学』中央経済社.
- 高橋勅徳・松嶋登 (2009). 「企業家研究のビッグ・ストーリー：方法としてのナラティブ・アプローチ」『国民経済雑誌』, 第200巻, 47-69頁.
- 知念渉 (2018). 『「ヤンチャな子ら」のエスノグラフィー：ヤンキーの生活世界を描き出す』青弓社.

中川敬一郎（1981）『比較経営史序説』東京大学出版会.

松本康（2021）『「シカゴ学派」の社会学：都市研究と社会理論』有斐閣.

水野英莉（2020）『ただ波に乗る Just Surf: サーフィンのエスノグラフィー』晃洋書房.